

随想



“ふるさとづくり”に

想う

主筆 偉佐雄

自然保護運動と共に、新しいふるさとづくり運動がすすめられております。大変大事な運動であると共に楽しさがあり心のぬくもりを感じております。日本人はもともと自然観自体よくないし自然愛護の思想を高揚すべきであるとの反省もさせられております。

ふるさとづくりを推進していくなかで、その中心はやはり郷土愛に燃える青年たちであった。地域の青年に対する期待と夢があり、青年の共通のねがい、目的があった。

また、十五夜などは、青年たちがワラを持ち寄って、村の長老から綱の作り方を習い、老若男女で綱引きし、その綱を土俵の輪にして、大人が賞品に鉛筆やノートを提供し、子供が相撲をとり、それにみんなで応援した光景を思い出す。

また、日常生活の中に、緑々しく茂った樹木や美しい花を咲かせる自然の魅力的な神秘などに引かれる心のゆとりはないものだろうか。自然を大事にし、大いに自然にふれ、大きな希望と夢をもって、自然の中に生きたいものだ。

また、青年をとりまく生活環境も変化する、その欲求も多種多様化して、青年の価値観も違う。しかし、我々のふるさと「熊本」は、県民みんなで大事にしたいものである。

自然保護教育が大事である様に感じます。幼児教育、学校教育、社会、生涯教育と全般にわたって自然愛の心を養っていくべきでしょう。

私達が常に心の糧として又ささえとして、かくことの出来ない「ふるさと」づくりについて身近な問題から考え取り組むべきだと思えます。

緑を大切にす「緑化推進運動」が展開されます。「美しい緑は誰のもの」メロディーが流れそうです。みどりの勉強、植樹、街路樹の手入れ等地域地域の足もとに一杯ころがっています。

あ、あるいは、伝統文化にふれ、時に技と力を競うふれあいの場、そして、地域住民一体となったふれあいの場・・・新しいふるさとづくりは、ふれあいの場からはじまる。美しいふるさと熊本に生きる青年として、大いにふれあいの場を広め、郷土の担い手として連帯意識を強めよう。そして、新しいふるさとづくりは、我々青年の手で率先して行きたいものだ。

(熊本県青年団協議会会長)

高校進学に

思う

坂本 二三子

「行って来ます」。今日も元氣な声で送り出し、ふと庭先に目をやると、いつものまにか若葉も色濃くなり、日射しも初夏の気配が感じられます。

考えるともなく、長男が中三に進んだ昨年の春以来の、気ぜわしかった一年間をふり返ってみたりするこの頃です。

中学二年の頃までは、大学進学率の高

す。公共性の場所、施設をお互いに大事にし十分に活用すべきです。共同体社会の考え方をとり入れ、ふれあいの場をみんなのでづくり生活の中に組み入れていくべきです。

「ふるさとづくりは家庭の中から」「ふるさとづくりを考える日」「ふるさとづくりと私」等のテーマをつくり身近な問題として実践していくことが人生の楽しさにも結びつくと思えます。花木を植え自然を愛し郷土の文化をたぐね楽しむ事はまさに人間のみが、こうむる事が出来るものです。

人間の最高の幸福は「豊かな心」がもてる事であるといわれます。いろいろな出合で、ふとすばらしい人間性と暖かい心をそなえられた方を語り合いの中に感じた時、自分自身までその人のぬくもりが伝わってくる様な気がして一日中楽しさと幸福を感じることがあります。そして今度は自分の方から心のぬくもりを伝えることが出来る様に励みたいと思えます。人々から人々へと心の輪が広がることとがすばらしいふるさとをつくることに結びつくと思えます。今日も又「ふるさとづくり」に想いをよせ楽しく過ごしてまいりましょう。

(青年会議所熊本ブロック協議会会長)

いA校への進学を、親子共々に希望し、何となく行けそうな気持ちがあったものでした。

三年の二期期に入ると、何回となくテストが行なわれ、進学可能な学校の振り分けがされました。親子で話しあった上で、学校、本人、親の三者面談に臨み、進学学校を決めるのですが、実際は、担任の先生の手許にある本人のテストによる得点数と、希望高校の合格圏の点数を照らし合わせて「大丈夫」、「まあまあ」「無理」と出されるわけです。

希望校と本人の点数が一致した時は、数分で終わります。進学学校を決めるのに、本人の個性も、好みも、可能性も問題とされることはないようでした。全く、点数だけによって「あっちの学校」「こっちの学校」と振り分けられたようです。高校間にあるランクが、そのまま受験者の振り分けに適用されるという印象を受けました。

私としては「長男はA校へ合格出来さえすれば、もまれて、きつと伸びるのではないか」との期待が捨てきれませんでした。B校への進学は、本人のたつての希望であり学校側のすすめもあって、我が家の長男の場合は割にすんなり決まったのでした。

けれど、知り合いの奥様たちから「大学へ進むならA校でないとだめよ」と聞かされると、「どうにかしてA校

“新しいふるさと

づくり”を考える

鳥居 憲太郎

沢田知事が新しいふるさとづくりを県政の基調とされていることは、大変意義深く、賛同するものです。私もふるさと熊本に住む青年として、新しいふるさとづくりをふれあいの場という観点から考えてみたい。

今日、レジャー産業の発達やマスコミなどの普及により、快楽や知識、情報などを求めることは容易になってきた。その結果、楽しくして、利根的な快楽を求める青年、また、毎日の生活の忙しは、目の利益だけに関心をもつ、エゴの強い青年をもつくりだした。

少なくとも、私の覚えている子供の頃は、そうでなかったように思う。それは現在興味や関心を引く伝統文化や文化財あるいは村や地域に伝わる祭りや催しものにも関心をもつこともできる。

例えば、村の祭りや運動会ともなると、大人も子供も、また村の長老も加わり、大いに楽しんだものだ。そこには、それぞれのふれあいの場が生まれ、そし

に」と、いやがる子供を説得しかけたこともありました。

市内の中学からの高校進学希望者数は今春八千九百七十二名で、その内、公立普通高校への合格者は、千八百余名という事で、大体進学希望者の五分一だけが「是非行きたい」とする学校へ行けるという事です。五分四は実業高校や私立高校へ、やむなく進学している、ということになるのでしょうか。

長男は幸にして五分一の中に入れましたが、五分一の中においても高校格差が著しい為、中学生活において早くも厳しい競争が始まっているのです。

「すこやかな精神の持主であって欲しい」との親の切なる願いも、子供の顔を見ると「勉強は大丈夫か？」という言葉にかわっていただけではないでしょうか。

我が子のことだけで精一杯の一年間で世の中のことに目をむけるゆとりもありませんでしたが、進学率も高い昨今のことと、せめて子供達が差別をうけることなく高校へ進学出来るようにならないものか。人格形成上、大事な中学時代には、スポーツを楽しむ、友情を深め、のびのびと勉強出来るようにならないものかと今さらのように考えてしまいます。

(主婦)